

桐朋学園大学大学院 修士課程

修了演奏発表

<大学院修士課程2年>

声楽

2019年1月26日(土) 13:00開演 (12:30開場)

桐朋学園大学 調布キャンパス C008教室

【13時00分～】

齋藤 秀和

共演者：野間 春美

フランツ・シューベルト Franz Schubert(1797-1828) 作曲

連作歌曲集『冬の旅』 op.89 第2部(第13曲～第24曲)

- 第13曲 Die Post 「郵便馬車」
- 第14曲 Der greise Kopf 「霜おく髪」
- 第15曲 Die Krähe 「からす」
- 第16曲 Letzte Hoffnung 「最後の希望」
- 第17曲 Im Dorfe 「村にて」
- 第18曲 Die stürmische Morgen 「嵐の朝」
- 第19曲 Täuschung 「まぼろし」
- 第20曲 Der Wegweiser 「道しるべ」
- 第21曲 Das Wirtshaus 「宿屋」
- 第22曲 Mut 「勇気」
- 第23曲 Die Nebensonnen 「幻の太陽」
- 第24曲 Der Leiermann 「辻音楽師」

第13曲 Die Post 「郵便馬車」

Etwas geschwind Es-dur(C:) 6/8 拍子

3行4連の詩は、各連それぞれ2行の主要部と“Mein Herz”というリフレインから成る。かつての恋人が住む町から遠く離れた主人公は、街はずれからやってくる郵便馬車の馭者が吹くラッパの音に胸の高鳴りを感じる。「一通の便りさえもたらさない、それなのにどうして奇妙なほど胸高鳴るのか？」と問いかけ、その問いかけに「馬車が恋人の住む町からやってきたからだ」と答える。そして最後に抑えがたい恋人への想いを自らの心に問いかける。曲は2連ずつをまとめた有節形式で、第1連、第3連はEs-dur、第2連、第4連はes-mollで書かれ、この転調は主人公の心情の変化を効果的に表現している。また第1連と第2連、第3連と第4連の間に1小節の全休符が配置され、全休符を境に曲は次第に高まりを見せ、主人公の心の叫びを表わすように最高音に到達する。ピアノは前奏で馬車の車輪の回転を連想させる動きと郵便ラッパの旋律を奏でる。第9小節以降は馬の蹄の音を模したモチーフ、第27小節以降からの4分音符と8分音符から成る規則的なリズムは、歌とともに次第に高揚する主人公の感情を表現するかのようである。

第14曲 Der greise Kopf 「霜おく髪」

Etwas langsam c-moll(h:) 3/4 拍子

4行3連の詩にA-B-A'の形式で作曲されている。前奏では疲れ切った体を引きずるように途切れがちに上昇する旋律が第3小節で頂点へと到達し、そこから崩れ落ちるように下行し元に戻る。このモチーフは歌へと引き継がれ不協和音の緊張した響きとともに主人公の苦悩を表現しており、その後も曲中に完全な形で、また断片的な形で用いられている。自分の髪に霜が降りて白い輝きを放つものを見て、主人公は喜ぶがその輝きは見せかけに過ぎず、霜はすぐに溶けて黒い髪があらわになる。自分の若さに戸惑い、死までの道のりの遠さに絶望し、一夜で髪が白くなる人もいるのに、これだけの苦悩を経て、どうして自分の髪は白くならないのかと自問し、その深い悲しみが語られ歌は進んで行く。第3連では再び冒頭のモチーフが現れるが、第36小節から第39小節に向かって一旦C-durに終止する。しかし休止をはさんで突然c-mollに転調して曲は締めくくられる。

第15曲 Die Krähe「からす」

Etwas langsam c-moll(h:) 2/4 拍子

冬の旅には動物が象徴的なものとしてしばしば登場するが、からすはドイツの民間信仰によれば間近に迫った死を予告する鳥である。4行3連の詩にA-B-A'の形式で作曲されている。歌は第1連で、ピアノの前奏の旋律を引き継ぎ「からすは町を出た時からずっと付いて来て、頭の周りを回っていた。」と淡々と語る。第2連では「ここでもうじき私の体をついばもうと思っているのか？」と主人公は自分に付いてくる理由をからすに問いかける。第3連では、自らの死が近づいていることを願い、からすに対して「墓場に至るまでの忠誠心」と心の叫びを吐露する場面で最高音g'に到達し、音楽的な頂点を築く。ピアノは前奏から頭上を飛ぶからすの様子を模した8分音の旋律と羽ばたきをイメージさせる16分音符の3連符が基本のモチーフを形作り、曲の終わりまで途切れることなく奏される。第3連ではピアノが高音域で16分音符の3連符を打ち鳴らし、歌とともに高揚感を表現し、後奏では死へ向かうかのように低音域へ下行して曲は締めくくられる。

第16曲 Letzte Hoffnung「最後の希望」

Nicht zu geschwind Es-dur(D:) 3/4 拍子

詩は4行3連から成る。主人公は冬の森の木々に色づいた葉が残っている情景を見て、物思いにふける。そしてその中の1枚の木の葉に自分の希望を託す。風が木の葉を揺らし、彼も激しく体を震わせる。ついに木の葉は落ち、彼の希望も潰え、その場にくずおれて号泣する。ピアノには冒頭から裏拍にアクセントが置かれ、小節線をまたぐ2つの8分音符が連続する。それに加えて調号通りのEs-durではなく、同主調のes-mollでの前奏の開始は、あちらこちらに木の葉の落ちる情景、それを眺める主人公の不安定な心の状況を暗示するかのようである。第26小節「ああ、そしてその葉が落ちると…」では、歌に対応してピアノが下行音型を刻み、それに続き第32小節「私自身もくずおれる…」では下行音型は更に拡大し、この曲の最低音まで下行する。第3連最終行「私の希望の墓に涙を注ぐ」では、これまでの歌の基本音価の8分音符から4分音符へと変化し、特に「wein(泣く)」の反復では長6度跳躍し、主人公が思う存分泣く様子を表現している。主人公の魂を浄化するように変終止で曲は締めくくられる。

第17曲 Im Dorfe「村にて」

Etwas langsam D-dur 12/8 拍子

詩は全12行で、第1連は8行、第2連4行と変則的に分けられているが、曲はA-B-A'の形式で作曲されている。主人公は夜も休まず旅を続け、とある村を通りかかる。村人たちは皆、寝床で夢を見ている。ピアノは犬をつなぐ鎖のじゃらじゃら鳴る音と、犬の吠える声を模した和音を奏でる。1小節12拍中に5拍分の休符が効果的に挿入され、この形は中間部を除き、冒頭から最後まで一貫している。歌は淡々と開始されるが、第1連5行の第17小節「朝になれば全てが消え去ってしまう」と語られる“alles(全て)”のリタルダンドは、まるで夢見る人々に対する皮肉のようである。中間部B「それもよい、彼らは夢を楽しみ」でG-durに転調し、穏やかな眠りの中で夢に希望を託す人々の様子を美しい旋律で表現するが、人々に向けられた批判はここでも変わらない。幸福な夢の余韻を引きずるかのようD-durへ転調しA'で冒頭のモチーフへと戻り、第44小節から第45小節「眠っている人々の間で、何をぐずぐずしているのか。」では、主人公は自らの意志で旅を進める決意を高らかに歌う。再び冒頭のモチーフが奏され、静かに曲は締めくくられる。

第18曲 Die stürmische Morgen「嵐の朝」

Ziemlich geschwind, doch kräftig d-moll 4/4 拍子

4行3連の詩にA-B-A'の形式で作曲されている。ユニゾンの力強い上行形をもってピアノは開始される。上行するユニゾンが登りつめた第2小節の3拍目で、減7の不協和音がfzとともに響き、下行の3連符の繰り返しを経て、第3小節の3拍目で主和音に解決する。前奏の勢いそのままに歌は「嵐は何と激しく切り裂いたことか…」と自然の荒々しさと、主人公の常軌を逸したような興奮の様子を表現する。ピアノのなだれ落ちるように下行する3連符が第9小節の3拍目で完全終止し、第2連「赤く燃え上がる炎が

雲間を縫って…」から B-dur へ転調する。ここで行進曲風の旋律となり、歌とピアノはリズムの刻みを合わせて一体となり、この嵐の朝の様子がまさに「自分の気持ちにふさわしい」との詩の内容を力強く歌う。第3連で冒頭のユニゾンが戻り、第16小節「それは冬に他ならない…」では主人公の絶望を浮かび上がらせるようにピアノの16分音符の和音が激しく打ち鳴らされ、「冷たく荒涼とした冬なのだ。」と更に嵐が強まるような表現で劇的に締めくくられる。

第19曲 Täuschung 「まぼろし」

Etwas geschwind A-dur 6/8 拍子

詩は連を分けず全10行で書かれているが、シューベルトは4行、3行、3行に分け、A-B-A'の形式で作曲している。ピアノは右手の4分音符と8分音符の組み合わせ、左手の上行のアルペッジョをほぼ全曲を通して奏でる。前奏は「揺れ動く一つの光」が妖しい幻の世界へと誘い込むかのように進んでいく。歌は軽快に始まり、主人公は自分を惑わす光が死の世界へと導くことを知りながら、妖しい光の後を追っていく。第19小節から第20小節の「さすらい人を誘惑する」で詩の内容を反映するように、大きく跳躍し、ピアノも同調してこれまでの音域を跳び越えた動きをみせる。中間部第22小節で前触れもなく同主調 a-moll に転調し、「私のような惨めな者は…」で主人公は嘆き、「氷と夜の闇と恐怖の向こうに…」では半音階の動きで心の迷いを歌う。再び A-dur へと転調し、冒頭のモチーフに戻り、「私が得たものは惑わしただけだ」と自嘲し、後奏で妖しい光の甘い誘惑は余韻として静かに響き、曲は締めくくられる。

第20曲 Der Wegweiser 「道しるべ」

Mäßig g-moll(f:) 2/4 拍子

4行4連の詩に A-B-A' -C-C' (C' は第4連の反復)の形式で作曲されている。ピアノは冒頭で主人公の歩みを表すモチーフを8分音符の刻みで示す。このモチーフは前奏から最後まで一貫して響き続ける。前奏に導かれるように第1連「いったい私はなぜ、…」と淡々と歌は始まる。第2連の「人目をはばかるようなことは、何一つしていないのに…」で前触れもなく同主調 G-dur に転調し、自分は何も罪を犯していないと訴えるように歌うが、直後には e-moll に転調し、「何という愚かな欲求が…」で主人公は苛立ち、絶望を歌い、ピアノはユニゾンで歌とともに感情の高揚を表現する。半音階的にゆっくりと下行する間奏が止まった先に、道標が立っている。しかし第3連で歌は「suche(求める)」「und(そして)」と激しく跳躍を繰り返し、主人公が安らぎを求めさまよう姿を表現する。第55小節からピアノに導かれ、主人公はゆるぎなく立つ道標に辿り着く。第4連で歌の旋律はレチタティーヴォ風となり、主人公は進むべき道を語る。ピアノは主人公の死へ向かう旅を運命づけるかのように第67小節から第74小節にかけて執拗に8分音符でg音を鳴らし続ける。第78小節から「まだ誰も戻ってきたことのない道を」は2度繰り返されるが、主人公の死に安らぎを求めようとする心情と、生に対する執着心が葛藤するかのようである。同時にピアノが讚美歌のように響き、曲は静かに締めくくられる。

第21曲 Das Wirtshaus 「宿屋」

Sehr langsam F-dur 4/4 拍子

4行4連の詩に A-A-B-C の形式で作曲されている。題名の「宿屋」とは教会の墓地を意味している。ピアノは前奏で4分音符1つと8分音符2つからなるリズムを奏するが、このリズムの組み合わせはシューベルトの作品では「さすらい」のモチーフとしてよく知られている。前奏は厳かに始まるが、g-moll、d-moll 的な要素があり、主人公の安らぎと不安という心理状態を表すかのようである。歌は静かに、穏やかに第1連、第2連で、主人公は長い旅を経てようやく苦しみから解放され、安息を得られる宿屋を見つけたと歩みを止める。第3連に向かう間奏で「さすらい」のモチーフに1オクターブ高い音が重ねられ、安らぎを得ることが予感されるが、それに続く歌で、主人公は墓地からも拒絶される。第3連第3行「私は疲れて(matt)倒れそうなのに…」の“matt”では完全4度跳躍し最高音 f' を歌うが、ここに主人公の抗議、諦めといった感情が表現されるかのようである。第4連第3行、第4行は反復されるが、「それなら、ただ(nur)先へ旅を続けよう」の“nur”は初め短3度跳躍し es 音、次は完全4度跳躍

し f' 音がおかれている。ここには主人公の安らぎへの期待を捨てて、先へ進む意志の強さが滲み出ている。冒頭のテーマが再び流れ、曲は締めくくられる。

第22曲 Mut「勇気」

Ziemlich geschwind, kräftig g-moll(fis:) 2/4 拍子

4行3連の詩にA-A-Bの形式で作曲されている。ピアノの前奏は劇的に開始されるが、第1小節、第2小節の2拍目にアクセントがおかれ、力強さを一層際立たせている。歌は第1連、第2連で同じ旋律を繰り返す。シューベルトは詩を2行ずつの対にして、主人公の心理状況を語る1行目はなだらかな旋律の動きに、それに対する主人公の反応である2行目はD-dur、G-durに転調し、動きをもって歌われる。第3連はG-durに転調し、「喜んで世の中へ向かって飛び込もう、風と雨に逆らって」とこれまでの旋律を更に発展させ、主人公は自らを鼓舞するかのようになららかに歌う。ピアノはそれを和声的な動きで支え、音楽的な力強さを増大させていく。第49小節から第50小節では主人公の不安な気持ちを表すかのようにg-mollへ戻るが最後には「この地上に神がないなら、我々自身が神になろう！」では最高音のg'音をなららかに歌う。心の高揚をそのままの勢いで後奏が力強く奏され、曲は締めくくられる。

第23曲 Die Nebensonnen「幻の太陽」

Nicht zu langsam A-dur(G:) 3/4 拍子

詩は連を分けず全10行で書かれており、意味的には2行ずつで一つのまとまりを持っている。シューベルトは4行、4行、2行に分け、A-B-A'の形式で作曲している。ピアノには、ほぼ全曲を通じてサラバンド舞曲的な3拍子のリズムが聞かれる。また4声体のコラル風に書かれているが、大譜表の2段ともにへ音記号で書かれ、曲集中最も低い音域に音が密集している。歌は第1～第2行と第3～第4行の4小節で同じ旋律を歌う。最初の4小節はA-durで「天空にかかる3つの太陽を眺める私」、次の4小節はfis-moll(一部h-moll)で「太陽もうつろな目で立ち止まったままだ」とその情景を描き分けている。第16小節で前触れもなく同主調a-mollへと転調する。第5～第6行「ああ、お前たちは私の太陽ではない…」とレチタティーヴォ風に過酷な現実を語り、第7～第8行では更に感情が高揚するが、「今は最良の2つが沈んでしまった」を受けて、ピアノが下行し、A-durへ転調する。深い諦念のうちに最終行は「暗闇の中で、私はもっと心地よくなるだろう。」と呟かれ、後奏とともに曲は静かに締めくくられる。

第24曲 Der Leiermann「辻音楽師」

Etwas langsam a-moll(g:) 3/4 拍子

詩は4行5連で書かれており、音楽的には第1～第2連と第3～第4連は同じ旋律を歌い、第5連に新たな展開がみられるA-A-Bの形式で作曲されている。主人公は旅の途中で初めて人に出会う。その人物は村はずれに立ち、誰に聞かせるでもなく、ただ機械的にライアーを弾く老人だった。ピアノの左手は前奏からライアーの響きを模した前打音を伴う空虚5度を奏でる。空虚5度の響きは1小節ごとに弾き直され、全曲を通じて絶え間なく鳴らされる。ピアノの右手は、老人の唯一奏でることのできる旋律を単調に繰り返す。第1連から第4連までピアノ(老人)と歌(主人公)は同じ旋律を断片的に繰り返すが、主人公が語っている時は、ピアノは旋律を奏でず、決して交わることはない。第5連で主人公は意を決したように「不思議な老人よ、あなたと一緒にいくべきなのか？」と問いかける。この問いに答えるようにピアノは旋律を奏でる。最終行の「私の歌に合わせて、あなたのライアーを回したいのか？」の問いかけでは歌とピアノが互いに響き合い、更に第58小節でピアノはfを鳴らす。しかしそれは一瞬のうちに静寂へと変わり、主和音の響きとともに曲は締めくくられる。

※各曲の調性横にある()は演奏する際に使用する調、()がない曲は原調で演奏。

G. Donizetti 《L'elisir d'amore》

“Quanto è bella, quanto è cara”

“Una parola, O Adina.”

“Ardir! Ha forse il cielo...”

“Caro Elisir! sei mio!”

“Una furtiva lagrima...”

G. ドニゼッティ作曲 《愛の妙薬》

第一幕

第一景

合唱と3人の主要人物のカヴァティーナで構成された導入曲(ネモリーノ、アディーナ、ベルコーレ)ジャンネッタを交えた農民の合唱の合間にネモリーノがアディーナへの憧れと切ない思いを歌う(「なんと美しく、なんと可愛い Quanto è bella, quanto è cara!」)。読書をするアディーナが笑い声を立てて、トリスタンが魔法使いに愛の妙薬をもらってイゾルデを射止めた話を皆に読み聞かせる。「そんな妙薬があったらいいね」と一同大笑いすると、行進曲に乗って兵士を連れたベルコーレが登場し、アディーナへ大げさに求愛する(「愛らしいパーリデのように Come Paride vezzoso」)。「簡単に征服されないわ」と返すアディーナ、嫉妬に苦しむネモリーノ、娘たちの合唱を交え、華やかなアンサンブルのストレッタで締めくくる。今回はこの中のネモリーノのカヴァティーナを取り上げる。

第三景

レチタティーヴォと二重唱(アディーナとネモリーノ)

ネモリーノは「一言だけ、ねえ、アディーナ」とアディーナを呼び止め、恋心を打ち明けるが、彼女は「私は気まぐれよ」とはぐらかす。優美な旋律の二重唱「優しいそよ風に尋ねてごらんなさい Chiedi all' aura lusinhiera」が始まり、短い経過部を挟み、魅力的な旋律を共有する後半部では真剣なネモリーノと彼を諭すアディーナのすれ違いが浮き彫りとなる。

第六景

シェーナと二重唱(ネモリーノとドゥルカマーラ)

ネモリーノは前景で万病に効く薬を宣伝し、村人を信用させたドゥルカマーラにイゾルデ姫の惚れ薬をねだる。「それはなんだ」とドゥルカマーラに聞かれたネモリーノが「つまり…愛を目覚めさせるという驚くべき妙薬のことなのですが… Voglio dire…lo stupendo elisir che desta amore…」と答えて二重唱となり、ドゥルカマーラが偽の妙薬を売りつけるとテンポをアッレーグロ・ヴィヴァーチェに速め、ネモリーノの感謝の言葉と彼の愚かさに呆れるドゥルカマーラの早口が見事な対照をなす。

第七景、第八景

レチタティーヴォ、シェーナと二重唱(ネモリーノとアディーナ)

ネモリーノは愛の妙薬と信じて安いボルドーワインを飲み、徐々に酔いがまわる。酔ったネモリーノは陽気になり「ララララ」と歌っており、それを見てアディーナは戸惑う。二重唱から三重唱、四重唱と展開される第一幕のフィナーレは、アディーナとネモリーノの心の駆け引きを演じる華麗なデュオで始まる(「喜んでいろ、薄情な女 Esulti pur la Barbara」)。三重唱に転じ、ベルコーレがネモリーノの笑い声に腹を立てているとジャンネッタが現れ、四重唱となり、ベルコーレに軍隊の出発命令が届く。ベルコー

レに今日中の結婚を求められ、アディーナが承諾すると、驚いたネモリーノは明朝まで結婚を延期するよう訴える(「アディーナ、僕を信じておくれ Adina credimi)。ホルンのソロを伴う哀切な旋律で音楽が真摯になり、嘆願するネモリーノ、彼を「愚か者」と吐き捨てるベルコーレ、「大目に見てあげてよ、彼はまだ子供で、無分別で、半分狂っているんだから」ととりなすアディーナの姿が感動的に描かれている。「先生、先生！」とドゥルカマラーを呼ぶネモリーノをよそに、皆は楽しげなアンサンブルを歌って立ち去る。今回はこの中の第七景と第八景のアディーナとネモリーノの二重唱を取り上げる。

第二幕

第八景

ロマンツァ (ネモリーノ)

前景のホ長調からは遠い変ロ短調に転じて歌われるロマンツァ「人知れぬ涙 Una furtiva lagrima」。ドニゼッティが以前作曲した旋律を愛の妙薬の台本作家であるフェリーチェ・ロマーニに弾き聴かせ、それに合う歌詞を書かせたと言われている。弦楽器のピツィカート、ハープの分散和音、ファゴットの前置で歌い出され、「ああ神様、私は死ぬことだってできます Cielo, si può morir」で長調に転じ、切々たるカデンツァで締めくくる。この曲では二節目をドニゼッティが変奏した別のバージョンで歌うこともある。

若林 清香

共演者：川村 沙耶香

E.Elgar : Speak, Music

R.Quilter : Five Shakespeare Songs(Op.23)

- 1.Fear no more the heat o' the sun
- 2.Under the Greenwood tree
- 3.It was a lover and his lass
- 4.Take, O take those lips away
- 5.Hey, Ho, the Wind and the Rain

B.Britten : Fancie

B.Britten : A Charm of Lullabies

1.A Cradle Song

4.A Charm

R.Quilter : Music, When Soft Voices Die

19 世紀後半から 20 世紀に活躍したイギリスの作曲家、E. Elgar(1857-1934)、R. Quilter(1877-1953)、B. Britten(1913-1976)の歌曲を取り上げる。エルガーは 19 世紀ドイツの伝統の枠組みのなかでイギリスの精神を表現し、クィルターの歌曲創作はフランクフルト留学を経てシューベルトやシューマンといったドイツの伝統的なリートに強く影響を受けた。そしてブリテンは《ヴォツェック》を聴き、ベルクへの師事を望んだ。彼らの音楽の根底にはヨーロッパ大陸、特にドイツの音楽が息づいている。

E. Elgar : Speak, Music (1902)

A. C. Benson(1862-1925)の詩。2曲から成る Two Songs(Op. 41)の第2曲目である。音楽がもたらす安らぎが絶え間なく流れる旋律とピアノ伴奏によって表現されている。15/8拍子が5拍のまとまりを感じさせる。ベンソンとエルガーのコンビはイギリス愛国歌のひとつである Land of Hope and Glory も生み出した。

R. Quilter : Five Shakespeare Songs (Op. 23) (1919-1921)

5つのシェイクスピアの詩から成る曲集である。全て劇中歌であり、『シンベリン』『お気に召すまま』『尺には尺を』『十二夜』から用いられている。5つの歌曲はどれも雰囲気異なり、続けて聴くことによってひとつの世界を感じることができる。シンプルではあるが時に革新的要素も見え、この要素が全体を引き締めている。クィルターの繊細な書法が光る曲集である。どの劇中歌も後世の作曲家に靈感を与え、特に Under the Greenwood Tree は多くの作曲家によって歌曲にされてきた。

B. Britten : Fancie (1961)

A Charm of Lullabies (1947)より 1. A Cradle Song、4. A Charm

ブリテンの作品を3曲取り上げる。Fancieはシェイクスピアの戯曲『ヴェニスの商人』の劇中歌である。「浮気心は心でもなく頭の中でもなく、眼に宿る。そして眼の中で死んで行く。さあ、吊いの鐘を鳴らそう」という内容が澁刺とした音楽で表現されていく。

A Charm of Lullabies 子守歌のおまじない(Op. 41)は5曲から成る曲集である。子守歌の様々な姿がイギリスの詩人たちの詩で表現されている。今回取り上げるのは W. Blake(1757-1827)の詩である A Cradle Song ゆりかごの歌、T. Randolph(1605-1635)の詩である A Charm おまじないの2曲である。曲集全体がユーモアに満ち、軽妙洒脱な雰囲気をもつ。A Cradle Song はモダンな響きの伴奏とゆったりとした子守歌が絡み合う。A Charm は騒いで眠らない子どもに対する「いい子で寝ないとお化けや怪物のところへ連れていくよ！」という脅かしである。

R. Quilter : Music, When Soft Voices Die (1926)

P. B. Shelley(1792-1822)の詩。6曲から成る Six Songs(Op. 25)の第5曲目である。詩の儂さをクィルターの音楽が柔らかく包んでいる。「音楽は、優しい声が消えても、追憶のなかに響き続ける。香りは、愛らしいスマイルが萎れても、感覚のなかに残り続ける。薔薇の葉は、薔薇が散っても、愛する人のベッドを飾る。あなたの面影は、あなたが死んでしまった後も愛の余韻となってただよう」

Maurice Ravel:

Shéhérazade

1.Asie

2.La flûte enchantée

3.L'indifférent

Heitor Villa-Lobos:

Bachianas Brasileiras N°5

1.Aria(Cantilena)

2.Dansa(Martelo)

『シェエラザード』はモーリス・ラヴェル（1875-1937）が1903年に作曲した独唱と管弦楽による作品である。後にピアノ版に編曲された。詩は、ラヴェルも属していた芸術家グループ「アパッシユ」の友人、トリスタン・クリングゾールによるもので、『千一夜物語』を題材とした東洋的内容で絵画的表現を持つ。全音音階や五音音階、増2度を多用するアラビア音階、ペルシャの旋律などを多用することで、東洋的音楽を表出している。

【大意】

1. アジア

アジア、おとぎ話のような幻想の眠る国。今宵、お前のもとへ人知れず船出したい。私は行きたい、花咲き匂う島々へ、ダマスやペルシャの街へ。私は見たい、黒い顔の人々に巻かれた絹のターバンを、いかがわしい目つきの商人を、ペルシャ、インド、中国を。そして長い年月の後、私の冒険の数々を話してやりたい。シンドバットのよう。

2. 魔法の笛

闇は優しく、私の主人は眠っている。でも私はまだ眠れない。悲しみと喜びの歌を奏でる笛の音が聴こえるから。その歌は私の愛しい人が奏でている。窓へ近づくと、ひとつひとつの音が私の頬へ飛んでくる、まるで口づけするかのように。

3. つれない人

異国の若者よ。私の家の戸口で、あなたの唇は魅力的で知らない言葉を紡ぎだす。お入りなさい。ああ、でもだめ。あなたは行ってしまおう。あなたが遠のいていく姿を、私は戸口で見ているしかない。

『ブラジル風バッハ』は、ブラジルの作曲家エイトル・ヴィラ＝ロボス（1887-1959）の代表作のひとつで、さまざまな楽器編成による9曲からなる連作である。彼が敬愛したバッハの技法や精神を、ブラジル特有の音楽に結び付けることで、彼の祖国愛を表わした。第5番は、独唱と8つのチェロによる作品で、ヴォカリーズと短い歌詞による美しくも物悲しいアリア、一転して躍動感溢れるダンスの2曲からなる。本日はチェロとピアノに編曲したものを演奏する。

【大意】

1. アリア（カンティレーナ）

夕暮れ時、薔薇色の雲が夢見るようにゆったりと浮かぶ。果てしなく深い空を、月が乙女のように優しく飾る。すべての鳥たちは静まり、嘆き悲しむのをやめ、優しい月の光は銀色の影を海に映し出し、苦悩の涙と落胆に胸を締め付けられる。

2. ダンサ（マルテロ）

山里の小鳥イレレよ、私の恋人マリアはどこだ？イレレ、お前の歌がそよ風のように森の奥から聞こえ、悲しみを運んでくる。カンバシラ、ジュリチ、イレレ、歌うのだ。マリア、目を覚ましておくれ。森の小鳥たちよ、みな一斉に歌うのだ。

中本 良子

共演者：巻島 佐絵子
松原 えりか (Sop)
渡辺 大 (Ten)

① Poulenc

Metamorphoses “Raine des mouettes”

② Poulenc

Metamorphoses “Paganini”

③ Poulenc

La voix humaine

“ hier soir j'ai voulu prendre un comprimé ” ~ “J'e t'aime”

④ Poulenc

Dialogues des Carmélites

“Encore ces maudites feves ! ”

⑤ Poulenc

Dialogues des Carmélites

“Pourquoi vous tenez vous ainsi ”

⑥ Poulenc

Les Mamelles de Tiresias

“ Non monsieur mon mari ! ”

本日はプーランクの全3作のオペラ作品よりの抜粋と、歌曲2曲による “オール・プーランク” プログラムを演奏致します。

室内楽からピアノ作品、オーケストラ音楽、宗教的楽劇、バレエ音楽を含むあらゆる主要な音楽ジャンルの楽曲を作曲している近代フランスの作曲家フランシス・ジャン・マルセル・プーランク Francis Jean Marcel Poulenc (1899. 1. 7-1963. 1. 30)は、何よりもまず素晴らしい声楽作品の作曲家であり、見事な世俗的、宗教的合唱曲に歌曲、そして3つの傑作オペラを残している。

それは、ギヨーム・アポリネール Guillaume Apollinaire (1880-1918)のシュールレアリスム・ドラマによるオペラ・ブッフア《ティレジアスの乳房》(1944)と、ジョルジュ・ベルナノス Georges Bernanos (1888-1948) のシナリオによるグランド・オペラ《カルメル会修道女の対話》(1953-1956)、そしてジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963)の戯曲に基づく最後のオペラ《人間の声》(1957)である。

これらは題材や様式においてそれぞれ全く異なるものであり、3作しか残さなかったとはいえ、彼がこのジャンルの開拓に大きな意欲を持っていたことがうかがえる。

ユニークな点は、いずれの作品もオペラ用に台本作家が書き直したものではなく、原作の戯曲から、又《カルメル会修道女の対話》については、ベルナノスの映画の台本として書かれた長大なシナリオから、プーランク自身がカットを施して作曲しているところである。

①Metamorphoses “Reine des mouettes ”

「メタモルフォーズ(変身)」より “かもめの女王”

カモメに喩えた人物への思いに浸っている、1 分程の曲だが、そこに詰め込まれているものは濃く官能的で深い。「かつて肉体的な関係にあった女性。風の悪戯か、モスリンのヴェールの下表情が見える。それはうっすら頬を赤らめて、薔薇の色のように。かつて私の手に身をゆだね飲んだ、あの薔薇の色・・・秘め事のあれもこれもを思い出すね・・・」

②Metamorphoses “Paganini”

「メタモルフォーズ(変身)」より “パガニーニ”

バイオリンの名手でもあったイタリアの作曲家パガニーニの名前が詩のタイトルになっている。バイオリンによって喚起されたイメージの言葉を並べた万華鏡ともいえる詩。言葉そのものに深い意味はない。詩はどちらもルイズ・ドゥ・ヴィルモラン。聖女とも妖婦とも呼ばれた名門貴族の家系に生まれた女性。富と美貌と文才に恵まれ、アメリカの大富豪やハンガリーの大貴族と生涯二度結婚した。広い交友関係の中には J. コクトー、アンドレ・マルロー、サン＝テグジュペリなどがそれぞれ熱烈な思いを寄せた。1969 年 67 歳で逝去。

③La voix humaine 《人間の声》

“ hier soir j’ ai voulu prendre un comprimé ” ～ “J’ e t’ aime ! ”

オペラ《人間の声》の原作は、ジャン・コクトー(1889-1963)が 1929 年に発表した同名の戯曲である。プーランクは、六人組時代からの親友であった J. コクトーのテキストを約 40 年ぶりに採り上げる。それはコクトーが 2 度目の阿片中毒の時期に新境地開拓を試みた特異な戯曲《声》 だった。前 2 作(《ティレジアスの乳房》《カルメル会修道女の対話》)が示すプーランクの二面性 “放蕩児” と “修道僧” を超える相貌を垣間見せる。

《人間の声》の登場人物は、電話に向かって話している女性一人。電話の相手は、明日、他の女性と結婚する男性。前夜に交わされる電話の長い会話で、5 年越しの恋にピリオドが打たれる。その際、当時のフランスの極度に悪い電話事情を反映して彼らの電話は頻繁に中断や混線に妨げられるが、それによって先ず男の “嘘” が顕になる。電話のトラブルを機に、“嘘” をめぐって主人公の感情が変化し、様々な “思出” と共に心理ドラマが展開される。電話を重要な構成要素として巧みに生かす戯曲である。

Dialogues des Carmélites 《カルメル会修道女の対話》

宗教が否定されたフランス革命の時代に反逆罪に問われるコンピエーニュのカルメル会修道女たち。恐怖政治時代を生き抜いた一人の修道女の語りを元に、ドイツの女流作家ゲルトルート・フォン・ル・フォールが書いた小説『Die Letzte am Schafott (断頭台の最後の一人)』に基づき、フランスの名高い小説家ジョルジュ・ベルナノスが戯曲化したもの。

カルメル会修道女の一人である、託身のマザー・マリーの回想録に基づいている。カルメル会修道女でただひとり横死を免れたマザー・マリーの手記に想を得たル・フォールの小説には、史実には実在しない架空の修道女ブランシュ・ド・ラ・フォールスを登場させ、彼女がまさに主役を演じている。彼女は異常なほど心配性でごくわずかなことにも極端に怯える人物として描かれる。革命の恐怖から逃れるためにカルメル会修道女になるが、恐怖心は消えない。「殉教の誓い」の後、恐怖にかられて父の屋敷に逃げ帰る。

④ “Encore ces maudites feves !”

《カルメル会修道女の対話》第1幕第3場

“またこの不味いソラマメ！”

★共演者 ブランシュ 松原えりか

修道院内の塔

見習い修道女のブランシュと、仲良しの若い修道女コンスタンスと一緒に作業をしている。コンスタンスの陽気なおしゃべりを、院長が病床に臥しているのにとブランシュがたしなめる。コンスタンスは素朴に驚き、それでは院長の代わりに自分たち二人の命を召し上げてもらいましょう、と言う。さらに、自分たちは同じ日に死ぬような気がするとも言い、ブランシュを不安にさせる。

⑤ “Pourquoi vous tenez vous ainsi ”

《カルメル会修道女の対話》第1幕第3場

“もう20分も目を伏せたきり、ほとんど答えない。なぜだ？”

★共演者 兄騎士 渡辺 大

ブランシュの兄騎士は、修道院に居るブランシュの元を訪れ、修道院にも革命の嵐が迫っているので安全な父の家に帰るように勧めるが、彼女は納得しない。修道院に入ったのは恐怖から逃げたいからだけだと兄に非難されたブランシュは、自分は神に全てを捧げる修道女なのだと答える。

騎士が立ち去ると、虚勢を張っていたブランシュはひどく動揺し、ヴェールで顔を覆って面会に立ち会っていたマザー・マリーに励まされる。

⑥ Les Mamelles de Tiresias

“ Non monsieur mon mari !”

《ティレジアスの乳房》第1幕 第1場・第2場

“いいえ、旦那様！”

1910年代、ザンジバル（リヴィエラの架空の町）

序曲のあと、劇場支配人が挨拶する。支配人は「戦争が我々に残した教訓は何であったか？それは深刻な少子化を食い止めるために、子供を作れということなのである！」と力説する。

「いいえ、私はもう嫌です！」と登場した、美しくエキセントリックなテレーズは、男に仕える夫婦生活の不満を訴え、もう夫には服従出来ないと歌う。そして「私は兵士に！、芸術家に！、議員に！、そして大統領にだってなる！」という野望を大声で宣言する。闘志に燃えるテレーズが胸元をはだけると、風船の乳房が解き放たれて飛んでいく。自分の乳房にしばし見惚れると我にかえり、風船を割ってしまう。そのとき「ベーコンを焼いてくれ！」という夫の声が聞こえる。「もう沢山！」と夫を嫌悪するテレーズに顎髭が生えだし、体に男性の力がみなぎってくる。

テレーズはもはや夫のもとに戻る気は無いと告げ、自らテレーズ改め、ティレジアスと名乗る。

このオペラの最後のセリフは、「皆さま！子作りに励んで下さい！」

背景には、ナポレオン時代以来からのフランスの慢性的な子供不足があった。

台本は、プーランクがその詩に多くの曲をつけた、ギョーム・アポリネール(1880-1918)。

(1)R.Strauss Opera《Der Rosenkavalier》 Op.59

"Mir ist die Ehre widerfahren~Ich kenn' Ihn schon recht wohl, mon Cousin!"

(2)R.Wagner 《Wesendonck Lieder》 WWV.91

4.Schmerzen

5.Träume

(3)J.Massenet Opera《Werther》

"Werther! Werther!Qui m'aurait dit"

"Va! Laisse couler mes larmes"

"Ah! Mon courage m'abandonne!"

(1)第2幕、新興貴族であるファルニナルのお屋敷の広間は、娘ゾフィーと田舎貴族オックス男爵の結婚の準備が急いで行われている。ゾフィーは結婚への喜びで胸を膨らませ、まだ見ぬ花婿を今か今かと待ち望んでいる。貴族の結婚の作法として、まず花婿がやってくる前に、花嫁に銀のばらを『ばらの騎士』が贈るといふ大事な儀式があり、『ばらの騎士』であるオクタヴィアンが眩い衣装に身を包み、さっそうと現れる。はじめは儀式を執り行うことに緊張していた2人であったが、次第にオクタヴィアンはゾフィーの可憐さに心打たれ、ゾフィーもオクタヴィアンの若々しい姿に感動し、しばし見つめ合う、次第にお互い惹かれ合う。

共演：森川 史

(2)作詞者のマチルデ・ヴェーゼンドクの名前にちなみ、このように呼ばれるようになった全5曲からなる歌曲集はヴァーグナーのチューリヒ亡命時代の最後の時期、1857-58年に作曲された。ヴェーゼンドク夫妻は国外に逃れたヴァーグナーを援助していたが、彼の崇拜者であったマチルデとヴァーグナーは恋愛関係を持つようになる。そのような環境下の中で書かれた詩がこの歌曲集である。

第4曲である「Schmerzen 悩み」は、ヴェーゼンドク夫人が恋の悩みの深さを夕べに沈みゆく太陽に託した曲である。沈みゆく太陽の美しさを述べ、自分の心の悩みと苦しさを歌い、ヴァーグナーとの関係の苦しみを訴えるかのようである。

第5曲「Träume 夢」は、《トリスタンとイゾルデ》第2幕の愛の二重唱に用いられている。現実世界では許されないヴァーグナーとの愛を、せめて夢に託して歌っている儂い歌である。

(3)シャルロッテを深く愛していたウェルテルは激しく愛を告白するが、彼女はアルベールの妻となり、絶望して彼女の元を去る。

"Werther! Werther!Qui m'aurait dit"

第3幕、クリスマスの夕刻に、シャルロッテはウェルテルからの手紙を読み返し、彼女の心に影を落とす。何通も読んでいるうちに、ウェルテルが自殺をほのめかす手紙を手にしシャルロッテは激しく動揺する。

"Va! Laisse couler mes larmes"

そこへ妹のソフィーが現れ、陰鬱な顔のシャルロッテに驚く。どうにか姉を励まそうとするソフィーであるが、シャルロッテは悲しまずにはいられない。今はそっと泣かせてちょうだいと、15歳のソフィーに大人の心を伝える。

"Ah! Mon courage m'abandonne!"

ソフィーが部屋を去り、1人になったシャルロッテ。ウェルテルを愛しているという自分の本当の気持ちに目を背けることができなくなったシャルロッテが、私を救ってくださいと神に訴えかける。

1.

W.A.Mozart:Opera 『Idomeneo』

Quando avran fine omai l'aspre sventure mie?~Padre,germani,addio!

2.

W.A.Mozart:Opera 『Idomeneo』

Se il padre perdei la patria il riposo

3.

G.Puccini:Opera 『La Rondine』

Amore mio!mia madre!

1.

1781年、モーツァルトが24歳の時に作曲したジャンバッティスタ・ヴァレスコ台本のオペラ・セリアである。第1幕、クレタ島にて。トロイア戦争後、トロイアの王女イリアは敵国クレタに囚われていた。国を追われ、大切なものを全て奪われた身でありながら、嵐の海から自分を救い出してくれた敵国クレタの王子イダマンテに恋をしていた。父や兄を失った悲しみ、憎いギリシャ。しかし仇にも関わらずイダマンテを愛し、憎みきれない自分へ罪深さを感じ、不幸な運命を嘆く。

2.

イダマンテの父イドメネオは、嵐の海で海神ネプチューンと「もし生き延びることができたなら、海岸で最初に出会った人間を生贄として捧げる」という誓いを立ててしまう。しかしイドメネオが最初に出会ったのは息子のイダマンテだった。第2幕、イドメネオはイダマンテをアルゴスに逃す。イドメネオの優しい言葉に心を動かされたイリアは「私は父や祖国、安らぎを失いました。しかし今では貴方が父であり、クレタが我が家となりました」と伝える。

3.

1917年、プッチーニ作曲のオペラである。銀行家ランバルドの愛人マグダは毎日友人と華やかな生活を送っていた。しかし、本当にマグダが求めているのは高価な真珠の首飾りではなく、真実の愛なのだった。詩人プルニエに手相占いで「貴女は運命に導かれ、つばめのように夢の国を目指すでしょう、しかしまた巢に戻るでしょう」と告げられる。

そんな中、ランバルドの友人の息子、ルッジェーロが現れる。マグダはルッジェーロに惹かれ、真実の愛のために全てを捨てる決意をするのだった。

第3幕、自分が愛人であることを隠し、名前をポーレットと偽り、別荘でルッジェーロと二人だけの生活を送っていた。そこへルッジェーロの母から結婚を許す手紙が届く。「貴方の選んだ女性なら清らかで立派な方なのでしょう」と書かれているのを読み、深い自責の念に駆られたマグダは、ルッジェーロに身の上を告白し、「貴方の家に入ることはできない、大切な貴方のため、私たちは別れるべき」とマグダはつばめのように、逸楽の世界へと戻ってゆく。

共演：宮脇臣

<ご来場の際のお願い>

音楽部門の警備室にて、お名前を確認できるものをご提示頂きます。

ご提示のない場合や定員を超過した場合は入場をご遠慮頂く場合もございます。

<試験のため、以下の諸点についてご注意いただきたくお願いいたします>

(1) 写真・ビデオ等の撮影・花束贈呈・演奏中の入・退場

はご遠慮ください。

※演奏者交代時等演奏の合間の入・退場は係員の指示に従ってください。

(2) 小学生低学年以下のお子様の入場はご遠慮ください。

(3) 会場内では携帯電話およびアラーム時計等の電源をお切りください。

(4) 採点員席への立ち入りは固くお断りします。

桐朋学園大学大学院

電話 042-444-7055 (調布キャンパス代表)

FAX 042-444-7056